

9/9(金)

## 【シンポジウム】日本の精神保健福祉サービスを「リカバリー志向」に変革するために (パート3) ～「ピアサポーター」から見える新しい支援の関係性～

**シンポジスト:** 「ピアサポーター」から見える新しい「支援」の関係性 門屋充郎 (十勝圏域障がい者総合支援センター)  
地域活動支援センターでの活動を通して見えてきたこと 磯田重行 (地域活動支援センターぷらっと)  
WRAP の活動を通して見えてきたこと 鈴木司 (とちかち WRAP 研究舎/WRAP ファシリテーター)  
退院促進・地域移行支援事業の活動を通して見えてきたこと 辰村泰治 (やどかりの里)  
アメリカの「ピアサポーター」の動向と課題・可能性 相川章子 (聖学院大学)

**指定発言者:** ～病院・地域・当事者グループでピアサポート支援に長年関わった立場から～ 土屋徹 (オフィス夢風舎)

**コーディネーター・司会:** 大島巖 (NPO 法人コンボ・日本社会事業大学) / 宇田川健 (NPO 法人コンボ)

地域活動支援センターの施設長であり、当事者でもある磯田さんの話から始まりました。これからのピアサポートとして、“真実の苦しかった体験を語るができる・実体験に基づいて共感できる・お互いの強みも弱みも理解することができる・お互いに待つことができる・誰かのリカバリーモデルになれる・お互いのリカバリーを信じていることができる”ということ挙げ、お互いの向かう方向が同じであること、つまり語り合うことの大切さ、リカバリーを信じている強さがその方向だということでした。それには当事者と専門職の垣根を越えた理解、病気が有る無しに関わらずお互いを尊重し認め合うことが必要だということです。

鈴木さんの話は、「WRAP とは」から始まり、7つの WRAP のツールが紹介され、またリカバリーに大切なこととして、WRAP の立場から“希望・自分に責任を持つこと・学ぶこと・自分のために権利擁護すること・サポート”を挙げました。また、WRAP の活動を通して見えてきたこととして“WRAP は病状を管理するためだけのものではない・リカバリーは「回復」というより「成長」・自分で自分の人生の過程をプラモデルをつくるように楽しむ・自分でつくる楽しみがある・自分の未来を自分の手でつくる・これから花が咲くのに、つぼみのままでいいわというの・支援専門職スタッフ自身のリカバリー・家族自身のリカバリー”を挙げました。また WRAP を使って病院の中にも入っていつているそうです。

辰村さんは自分の 22 年に及ぶ入院生活にふれ、入院したとき全然退院させてくれなかったこと、院長が変わったらすぐ退院できたこと、退院後やどかりの里で仕事をしていることを話しました。やどかりの里で退院促進、地域移行支援事業のピアサポーターとして仕事をしていると、無理な注文をしてきて、どこまでそれに応じたものか困ることがあると話しました。親しくなっていくうちに「お金をかしてほしい」とか、いろいろな要求をしてくる人たちがいるそうです。無理な注文をしてきてもうまくかわすことが難しいと言っていました。

相川さんは北米のピアサポーター誕生の歴史から、ピアサポーター誕生の理論的背景としてセルフヘルプ・自立生活運動の権利擁護・就労や教育の機会などからクラブハウスやコンシューマー運営サービスなど新たなサービスができ、プロシューマーの雇用による効果で、クライアントのロールモデル・サービスの質の改善・プロシューマー自身のリカバリーの改善がおこり、結果としてスティグマの軽減がおこるということを挙げました。また北米では認定ピアスペシャリストという制度が2000年からジョージア州で制度化され、全米で5000人、約20の州で導入され、14の州で低所得者の使える医療保険であるメディケイド還付制度が導入されていることを紹介しました。資格取得カリキュラムとして多数のトレーニングモデルが開発され、内容としては、リカバリーとピアサポーターの役割・リカバリーストーリーの活用・ストレングス視点・効果的な傾聴と質問の技術・ピアスペシャリストの倫理と境界・職場における葛藤など、時間数は30～100時間ほどの認定のための研修があり、2年ごとの更新制であることを紹介しました。そのなかで、職場における葛藤として二重関係を挙げ、権力格差がおこると当事者は葛藤するので、スーパービジョンや研修・雇用方法の明確化・役割葛藤と混乱・守秘義務がベストプラクティスガイドラインとして2002年にSalzerによってつくられたことを述べました。また各地のピアサポート施設を紹介し、ピアサポートによる4つの変化として“利用者の変化、ピアサポーターの変化、他の職員の変化、精神保健福祉システムの変化・サービスの変化”を挙げて、アメリカからの日本へのメッセージとして「いつかは変わることを信じて一緒にがんばりましょう！Never Give Up!」を紹介しました。

指定発言者の土屋さんからは、全体のまとめをお話いただき、自分の役割は、本人のやりたいことを支持することで、これからの動きとしては100%当事者の運営でやっていけるのだということをお話いただきました。

《宇田川健（NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）》